ICT 海外ボランティア会会報
No. 85

2019 年 4 月 1 日（月）

URL: https://ictov.jimdo.com （2017 年以降の分）
http://www.ictov.jp （2016 年以前の分）
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
MOOCs その後－グローバルな動向
東京大学名誉教授
当会顧問　吉田　眞氏

◆特別寄稿
徒然日記(3)：シニア海外協力隊顛末記(2)
当会特別顧問　石井　孝氏

◆海外実践マネジメント
今も継続・拡大する Smart・PLDT プロジェクト(10)
元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現(株)ハイホーCEO　鈴木　武人氏

◆海外グラフィティ
「帳簿の世界史」を読んで
イチローと正岡子規
「戯伝写楽」を観て
北斎を考える
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智氏

◆海外便り
スペイン・モロッコ俳句紀行(5)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之氏

◆第 38 回海外情報談話会開催模様　事務局

◆第 39 回海外情報談話会開催のご案内　事務局

特別寄稿

MOOCs その後－グローバルな動向

当会顧問
東京大学名誉教授
吉田　眞

2015 年 4 月の海外情報談話会で、「MOOCs（Massive Open Online Courses）－世界の動向と展望-」というテーマでお話しをさせていただきました。MOOCs は、OER (Open Educational Resources) 「公開で誰でも“自由に使える”、教育に関する資料・教育」の一種であり、「そのための共有材を作る」【1】ことで進展してきました。その後、持続性の維持からさらにビジネス化を狙って世界的に変貌を遂げており、最近の話題を提供します。

基本：

MOOC は「大規模公開オンライン講座」と訳され、「無料で大学レベルの正規講義（の圧縮版）をネットで受講でき、一定条件を満たせば修了証がもらえる」ものです。米国起源（Coursera や edX が有名）ですが、ネット経由なので壁が低く「1 講座で数万人の受講者を集めた」、「世界中から優秀な学生をリクルートした」等の話題で、2012 年頃からブームとなり、欧米の主要先進国に急速に拡大しました。さらに、アジアでも中国、日本、韓国、東南アジアへの展開が進んでいます。【2】【3】【4】

現状で講座コンテンツは作成者・提供者の所有物で改変・再利用禁止が殆どであり、“利用が自由なオープンアクセス（だけ可能）”となっています。これに対して、中身を改変して再利用可能（Creative Commons License）な“Open MOOC”もあり、オープンソースの LMS （Learning Management System）等による MOOC もあります。（http://openmooc.org/ 等）

最近の動向：　世界的には依然拡大、収益型への努力

2018 年末のデータとして、量的には、世界中の受講者数は 1.01 億人、提供大学数は 900 以上、講座数は 11,400 と、いずれも前年より 2 桁増です。【4】質的には、形態の柔軟化（特定領域でのスキル認定、オンライン学位など）や、地域別の活動で、相違と特徴が出てきています。「無料聴講」が基本ですが、講座作成とシステムの維持には多大な資金と運用経費が必要です。これには、米国では有力財団の寄付・基金が、その他の主要国やアジアでは直接・間接の国の（強力な）支援が基盤を支えています。（日本については後述）

さらに、欧米中心に収益化の試みが急速に進み、学位や資格と関連させた有料プログラム（Microcredential, MicroMaster, micro-degree など）が増えています。しかしながら、MOOC には、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」【5】の目標 4「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」具体的な手段としての期待から、有償化にも限界があり、個々にはまだまだ赤字のようです。

一方、日本は他の地域と異なり、日本オープンオンライン教育推進協議会（JMOOC）【3】という民間非営利団体の会員の会費とボランティア的活動に依存しています。このような状況で、MOOC にはビジネスモデルの成立に課題が多く、今後も模索が続くでしょう。

狙いと利用動向：　国により多様

講座は、各学問分野、実務、趣味に至るまで幅広く提供されていますが、欧米では、高校生・大学生の学習、若手社会人のスキル拡大利用が主となっています。これに対して、日本では、各年代の割合の差が小さく、特に中高年の自己充実目的の利用が多いという特徴がありましたが、最近では企業での従業員教育等への拡大が進められています。

MOOC の狙いは以下の通りですが、前述のように国によって濃淡があります。

（１）多様な社会的ニーズへの対応：　一般人向け。特に日本では、生涯教育、趣味・自己啓発が多い。現在、JMOOC では、企業内教育への対応を強化。

（２）教育改善の手段：　初中等・高等教育の効果を高める。世界ではこの目的が主流で国が積極的に支援している。日本ではこの意識が低い。

（３）組織間連携の手段：　異なる大学の教員が協力し、さらに大学間連携を促進。

（４）個人のキャリア支援：　初中等教育から生涯教育まで、学習履歴記録で自己管理。
－大学に 3 回入る－　新入 18 歳、職業人 30 歳、シニア 60 歳。今後の方向。

当会の皆様には、世界中の講座から興味のあるものを試してみてはいかがでしょうか。当会としては、海外人材教育に利用できる材料として（MOOC 提供側への提案も含めて）検討してみてはいかがでしょうか。

■　参考サイト一覧

[1] UNESCO Open Educational Resources:
http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/access-to-knowledge/open-educational-resources/
[2] Massive Open Online Course:
https://en.wikipedia.org/wiki/Massive_open_online_course
[3] 日本オープンオンライン教育推進協議会（JMOOC）：https://www.jmooc.jp/
[4] Class Central: Year in review 2018, By The Numbers: MOOCs in 2018
https://www.class-central.com/moocs-year-in-review-2018
https://www.class-central.com/report/mooc-stats-2018/
[5] UNGC 持続可能な開発目標（SDGs）：http://www.ungcjn.org/sdgs/index.html

以上

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/

特別寄稿

当会特別顧問の石井様から、「呆け防止のためにブログを開始した」との連絡があり、ご本人のご了解を得て、いくつかの日記を下記のとおり転載いたします。
https://blog.goo.ne.jp/iwatukiishiikoh

徒然日記(3)：シニア海外協力隊顛末記(2)

当会特別顧問　石井　孝

4　如何にして仕事に手を付けるか

経営コンサルタント

シニアボランティアの仕事を強いて大別すると、技能伝授的なものとマネジメントをサポートするタイプに分けられる。筆者のケースは、依頼側本来の要請はカリキュラムの改良であるとか、教授方法の改善と云った技能伝授的要素が主であったが、前項で述べたような問題に直面すると、小手先で済ませる訳には行かない。難しいことではあるが、学校運営、即ちマネジメントの面から考えねばならぬと思った。

現役当時、民営化と云う経営の変革を実行する過程で、マッキンゼーやアンダーセン社の経営コンサルタントの世話になった経験を思い起こした。今度は、こちらが逆に経営コンサルタントになればよい訳である。既に、学校を取り巻く環境条件については、大まかな問題把握が出来たので、これを基に次のような手順で仕事の段取りを計画してみることにした。

A．実際授業を持つ形で現場に入り、現状の問題を肌で感じ取る。
B．把握した問題に関しては、組織全体の責任者である校長と十分議論を重ね、問題意識を共有する。
C．これら問題点の中で、重要で且つ現場で対応出来るものを選び、具体策を作り、ローカル的に試行する。
D．なお、実行は校長の指揮の下で、出来る限り教官等現地の職員が当る。
E．ここで達成したローカル的成果は、何らかの形で全国展開が図られるよう、常に配意する。

カウンターパート

このようなマネジメントの問題を取り扱う場合、組織の中で最高の執行権限を持つ人物、校長と常に連携を保てるような形を作り、お互いに十分な信頼関係を構築することが極めて大切である。

技術協力などで派遣される場合、派遣された者と受入れ側の接点となるパートナーが必要になるが、これをカウンターパートと呼んでいる。筆者の場合は、通信コースの科長である Boorom 氏がカウンターパート指定されていた。彼は苦学して大学を卒業後、チュラロンコン大学で技術関係職員として働きながら職業高専の教員資格を取り、幾つ

かの職業高専の教官を経て現在のポストに就いた。まだ、30 代であるが、勘の良い英語も解かる好青年である。

技能伝授型の場合であれば、コース科長の Boorom 氏が適任であるが、学校運営の基本を変えようとなると、コース科長ではとても無理で、相手としては校長しかない。筆者は、細かい事務的な問題は全て Boorom 氏と相談し、仕事自体に関しては校長と直接実行することにした。この点については、両氏共快く了解してくれた。

シニアボランティアのシニアボランティアたる所以

赴任準備のところで S1 フォームについて触れたが、これはシニアボランティアに要請する仕事のスペックである。これを読むと、依頼側の気持ちはそれと無く分かるのであるが、仕事の具体的中身となると今一つはっきりしない。このため、満足な準備も出来ず、欲求不満のようなものを感じながらの赴任となる。しかしながら、一旦現地に赴任してみると、なぜそうなのかがよく理解出来る。

頼む側からすると、何か大きな問題がある事は分かっているのであるが、それが具体的に何であるのか、どうしたら良いのかが分からないから頼んで来るのである。シニアボランティアは亀の甲より歳の功、長年の経験をフルに生かし、こう云った言わばカオスに近い状況の中から問題を抽出、整理し、これらに対する具体的な解決方法を見出さなくてはならない。これは、正に経営コンサルタントの仕事なのである。

また、S1 フォームに書かれている事がかなり明確で具体的である場合においても、その事項だけに捕らわれていると、重箱の隅を突ついて終わる可能性が無しとしない。よくよく検討してみると、それは目先の事で、それ以前にやるべき大切な事があるかもしれない。シニアボランティアの存在価値はこの辺りを見逃さない所ではなかろうか。

シニアボランティアは、このように気付いた事柄に関して意見やアドバイスを述べることは出来るが、執行する権限は持たない。新たに何かを実施するためには、執行権のあるトップをその気にさせ、やらせ、成果は彼のものとし、そこに根付かせ成長させる必要がある。シニアボランティアの経験、知識、技能等を十二分に活用するためには、カウンターパートは赴任先組織の長が望ましいと思う所以はここにある。

5-1　Mangkorn 校長と共に

人はみな同じ

校長の Mangkorn 氏は未だ 40 代後半の若手で、タイ人には珍しいやる気満々のアグレッシブな人であった。キングモンクット工科大学出身の技術屋で、熱心な教育家である。彼は 1,000 名以上居る殆どの生徒の名前を諳んじており、何か問題のある学生については家庭環境まで熟知していた。こう云う人と一緒に仕事が出来るとは大変ラッキーであると思った。

毎朝、校長とコミュニケーションを持つようにするため、米国在住の友人に頼み、ロイターのインターネットニュースを毎日送って貰い、その中から技術動向を中心にニュースを選択して、これを話の種にした。最初はお互いに遠慮もあったが、慣れてくると、公私に亘る話題に広がり、何時の間にか気の置けない付き合いが出来るようになった。人間は、言葉が違い、肌の色が異なり、生活習慣が変わっていても、本質はみな同じとつくづく思った。

仕事の方は相談の結果、ターゲットを次ぎの 2 点に絞り、Nawamin College 改革のための具体案を考えることにした。

A. 技術の潮流を教える

カリキュラムをチェックすると、１世代前の電話をベースにした電気通信技術が中心である。校内には、パソコンも数台あったが、専らワープロ用で、インターネット接続等は念頭に無いようであった。

人間相互の直接音声による通信は、携帯電話を含む電話網の完成によって一時代を画した。今や情報通信の対象はコンピューターを介した人間相互の通信、コンピューターと人間間の通信、コンピューター相互の通信にまで範囲を広げ、コンピューターの介在を特徴とするインターネットとこれをサポートする様々な応用技術がこれらをフォローしている。

そこで、筆者が先ず教官と専攻課程（Diploma）の生徒を対象に「インターネット概論」を講義し、更に専攻課程の生徒にはインターネットのキーテクノロジーである TCP/IP 技術（インターネットのプロトコル）を輪講形式で履修させてみることにした。また、これに並行して、インターネット接続が体験出来るコンピューター実習室を造ることにした。

B．一流企業に就職させる

生徒の就職状況を調べると、地元の中小企業などを中心に、校長の献身的売り込みのお蔭で、毎年９割方の卒業生が職を得ていた。

職業高専の先々を考えると、国内の情報通信に関連する主要企業への就職のルートを築く必要がある。このため、学校側、企業側がお互いにメリットが享受出きる On the Job Training のようなものを検討することにした。

また、急速に進む国際化の流れを考えると、特に大きな会社への就職の場合、英語の力を付けさせなければならない。英語に関しては、学校全体が余りにもお粗末である。これについても何か手を打たねばならない。

よろず相談窓口

とも角、これから皆の中に入って行動を起こす訳である。現地のカルチャーに漬かり込み、なるべく自然なコミュニケーションが出来るような状況を作らなくてはならない。更に、これからやって行く施策に対する反応、評判をストレートに聞き出せるようして置く必要もある。こんな思いのもと、現地語は不案内を承知の上で、教官、生徒全員を対象によろず相談窓口を開くことにした。(次号に続く)

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(10)

―『NTT を巡るグローバル環境の変化』日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、そして NTT のグローバル化へ―

元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現　株式会社ハイホーCEO
鈴木　武人

6：PLDT の経営

PLDT 買収の話が本決まりになって、初めてその本社ビルを訪ねてみました。幹部の部屋は大きく立派で、幾つかの部屋は庭付きテラスを持っており、家具・調度も立派な物でした。ところが、講堂に案内されると天井からアスベストスが垂下っているのを見て驚きました。アスベストスは幹部の夫々の部屋では見られず、多くの社員が集まる講堂が見逃されていたのです。この多量のアスベストスは PLDT の幹部が腐っていた事の象徴の様に感じました。直ぐにフロアーを閉鎖して、アスベストスの除去、さらにはそれ程使われては居なかったとの事でしたので、この機会を利用して、講堂のフロアーを事務フロアーに変更してもらいました。

PLDT 内部の不正は、経理面、幅広い社員との面談、噂話の検証で次々に明らかになりました。吃驚したものに、通信料金の延滞者が異様に多かった中、その延滞料金の取立て回収会社をオーナーである当主が設立・運営していて、高額の手数料を PLDT から支払わせていたのです。すぐ向かいのシャングルラホテルにプール付きのジムがあるにもかかわらず、その当主は本社ビル内に専用の立派なスポーツジムを作っていたのですから、トップからおかしくなっていたと言っても良いでしょう。現場サイドでも、申し込んでも電話を引くのに数年も待たなければならなかった状況から、PLDT の元幹部達を中心に組織的に別料金を徴収して、支払った顧客だけ早めに開通する、といった有様で、その不正は上から下まで蔓延していました。いちいち捜査・検証していては日常の業務が停止しかねない状況でした。この状況を一気に修復するために『社内犯罪、不正を犯していても、摘発される前に自主退社すれば罪を問わない恩赦（amnesty）制度』を公表し、結果的に多くの幹部を外部からの若手エリートへ入れ替えることが出来ました。

前向きなチャレンジも始めました。Mr. Al. Panlilio 等若手の幹部候補との買収完了直前からの話し合いの中で、既に Smart で試みていた法人営業体制を PLDT でも創設し、事業の拡大と充実を図る事としました。従って、Smart-NTT Multimedia 社はその母体として吸収する事としました。また、買収直後にマニラ

近郊の幾つかの電話局の見学、ヒヤリングを行った際に、市外と国際の電話交換業務オペレーター達が職を失うのではないかと恐れていたことからの思いつきでしたが、フィリピンは長い米国の植民地で英語教育が充実していたことから、コールセンター事業を創業する事をパンギリナン氏に進言しました。田嶋氏とフィリピンで既に同事業を開始していた Ken Bone 氏から種々ノウハウを学び、その結果、大きな将来性が見込まれたことから、Citibank の現地の CRM の責任者 Ms. Rose Montenegro をヘッドハンティングし、専用の建物も構築して事業を開始しました。当時コールセンター事業はインドが中心でしたが、英語の発音の癖の無さから米国、イギリス、オーストラリアから、保険、レセプト等種々の幅広いニーズがあり、必要なハード設備は同じで、顧客のアプリケーションを夫々の時間に合わせて設定し、オペレーターは 3 シフトで２４時間 365 日、殆ど休み無く稼動出来る非常に効率良いものとなりました。マカティ市やマニラ市では既に高層アパートが林立する状況で住宅コストが高いことから、此処に勤める多くの勤め人は 1 時間以上の郊外からの遠距離通勤が多かったのです。しかしながら PLDT のコールセンター事業がブームとなって、従業員数も 1 万人を越えるものとなり、若手夫婦が共稼ぎで市内に住んで、職場近接にして、互いに違うシフトで子供を育てるという新たな生活スタイルも出来てきました。その後、この事業については都市の分散化、また軌道に乗れば独立させて売却する方向となって、PLDT はこの国家的事業のインキュベーターの様になって行きました。

コールセンターを初めとして、当時急激に伸びつつあったインターネット事業、また NTT データの様なインテグレーションも含めて、PLDT を単なる通信事業から多様な事業への転換を図るために ePLDT を設立し、弁護士のエスピノザ氏を CEO に、またその後 NTT Com でアジアでのインターネットの普及を担当していた戸川さんにも赴任してもらい、これ等の新規事業の充実・拡大を図る事としました。ただし、発足してみれば、コールセンター事業は大成功、余剰局舎を用いた IDC はとも角として、漫画やゲームの作成、またアイデアだけのベンチャーの買収等に投資を重ねて、集中すべき経営の方向が分からなくなるような傾向があり、一時パンギリナン氏に見直しを迫った事もありました。

インターネットは日本では移動通信でも i-mode インターネット接続が提供されましたが、やはり PC 利用を中心に固定網を中心にモデモ接続から ADSL、FTTH と発展したと言ってよいでしょう。フィリピンでは PC が高価であった事からその普及が日本ほどには進まなかった関係で普及の道筋は大きく異なりました。電話の普及が固定網よりも携帯電話がリードしたのと同様に、インターネットも携帯端末から始まったといっても良い状況でした。即ち、第三世代の提供と安価なスマホの出現で一挙に普及となったのです。勿論、移動通信ではデータ通信料金が利用上の問題でしたが、Smart や Globe が争ってショッピングモールに安価なメンバー制、もしくは無料の WiFi を設けて利用を促進しました。その意味で固定網のインターネット普及の役割は限られたものでした。ショッピングモールは暑いマニラでの避暑の役割とインターネット接続の拠点となっています。フィリピン

では FTTH はまだまだこれからの普及が期待されている段階です。その様な状況で、PLDT は比較的若いパンギリナン氏の大学の後輩を固定公衆網事業に、またこれも Citibank からのヘッドハンティングで法人事業の夫々責任者に迎えました。

固定公衆網事業に関しては既にその限界を感じていたものですから、若い新たな責任者が張り切って地方電話会社の買収や、カード発行事業、固定インターネット事業等種々投資・出資項目を役員会への事前説明として提案してきましたが、殆ど拒否せざるを得ないと見做され、実施後の撤退策を一緒に提案すべきと何度か対立せざるを得ない状況がありました。

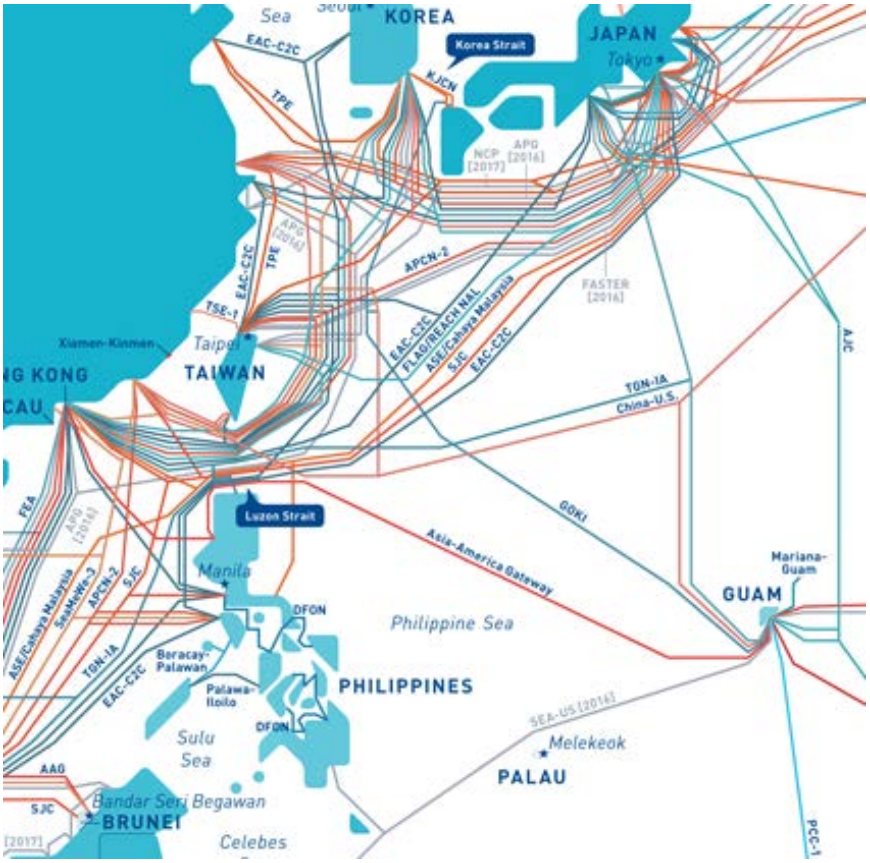
Fort Bonifacio Shopping Mall

フィリピンは日本と同じ島国ですから、島と島を繋ぐ事と、これをグローバルなネットワークに繋ぐ海底線が必須です。グローバルな海底線は関係する通信会社のコンソーシアムを形成して資金を調達して、請負会社に発注します。請負会社は NEC の様な通信機メーカの場合もありますし、商社やさらに通信会社だったりする事もあります。すなわち、かなり政治的な要素がある様に思われます。NTT Com への配慮や米国の安全保障政策等への配慮も欠かせません。

海底線には事故が付き物でした。地震による破壊や、陸揚げ点付近の浅瀬には埋設しているのですが、漁船の網や碇に引っ掛けられて断線するのです。従って陸揚げ点にはその様な事故に会い難く、また陸上のハブに出来れば近いところが望まれます。問題はその様な地点には限りがあり、競合通信会社と其処でも競業する事です。方路が多様化し、容量に余裕が出るにつれて心配しなくても良い様になりました。ただ、その容量から東アジアの主要海底線となっている APCN2 についてみれば、2，3 年に一度くらいの割合で地震やケーブル自体の故障でフィリピンを含む数カ国のインターネットサービスに影響を及ぼしています。

データ通信のトラヒックがインターネットの普及で音声を大幅に超えて行く状況で、Smart 網を一括して構築していた NOKIA から、次期システムとして全 IP 化交換機の導入計画のプレゼンを受けました。NTT を初め世界の通信業者が ATM の導入を急いでいると理解していた中でしたので驚きました。1980 年初頭に NTT データで STDM の導入を図り、米国へ赴任した直後の 1984 年に Palo Alto と San Francisco の間で、これを用いて音声通信を試みる現場に立ち会った事があったので、大変興味を覚えました。キャリアは音声通信を中心に考慮し、遅延の少ない ATM を選択・普及に努めたと言う事ですが、移動通信では既に音声よりもデータに重きを置き、音声もデータの一部として内包する考え方になっていたのです。確かにキャリアは ISDN の普及以来、音声は 64KB の品質を守ることが前提であったと考えられますが、移動通信の世界では音声は極度に圧縮され、8KB や極端にはその半分くらいで利用されるようになって、会話の意味は判別出来ても誰が話しているかの音質の判別は難しいレベルになっています。オレオレ詐欺等はこの特質を悪用したものと考えられます。GSM の導入の際に経験したことですが、当初の GSM はあらゆるプロセッサの処理能力は限られて居り、コーデックもその

一部ですから通話品質の上で決して喜ばれたものではありませんでした。しかしながら、現在に至るまでプロセッサの性能向上は止まる事無く、また海底線を含む伝送容量の拡大も止まる事は無い様です。このことから ATM ではなく、全面 IP 化という流れが自然と発生したものと思われます。実は IIJ を起こし、現在もその経営を担当するインターネット創生期からお付き合いが有った鈴木幸一氏と会う度に『NTT が ATM を選択したため、日本はインターネットから遅れてしまった』と小言を言われるのですが、『世界中のキャリアの選択だったので、しかたが無かった』と言い訳をしています。実際、IP 化が古典的キャリアのビジネスをすっかり変えたといっても良い状況と思われます。(次々号に続く)



＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/

海外グラフィティ

「帳簿の世界史」を読んで

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

アメリカ建国の父の一人であるハミルトンが「権力とは財布を握っていることである」と喝破したこの一言が表題の「帳簿の世界史」の内容を物語っているような感じである。会計数字をいかに正確に公開するかあるいはいかに隠すかの戦いが世界中の今日の国や企業で相も変わらず毎日展開されている。言葉を換えれば、会計はまぎれもなく「資本主義の支柱」ともいうべき存在だからだ。

最近の日本の某大企業の実例では、「いかに利益を大きく見せるか」という利益至上主義の作業が上からの圧力で会計数字をゆがめさせたかがわかる。管理会計が厳正であるべき財務会計を凌駕してしまった典型的な例であろう。「帳簿の世界史」は、「不正会計の世界史」でもある。

古代バビロニアの時代から帳簿はあった。しかし、不正を自動的に浮き彫りにする複式簿記ではなく、単式簿記であり、複式簿記の誕生は、ルネサンス期のイタリアまで待つ必要があった。日本はどうかというと、大阪の鴻池、江戸（もともとは伊勢商人）の三井、近江の中井家が江戸時代にすでに独自に複式簿記を発展させている。

ルネサンス期のベネチアで、メディチ家が当時ヨーロッパ最高の富豪と言われたが、それを支えたのが「複式簿記」であった。面白いのは商人と銀行家が特に「不労所得である金貸し」ということで、常に罪の意識にさいなまれていた。このことは、近江商人も同様で、逆に信仰心は篤かったのである。

国の統治者が自身で複式簿記を学んで、財政を理解できるのなら、その国は繁栄し滅ぶことはない。ベネチアのその後の衰退は複式簿記を軽視したからである。逆にスペインの次に一大貿易帝国を築いたオランダは、国を挙げて「会計学校」を各地に創立して、その普及に努めたのだ。

イギリスでは、著名な陶器ブランドであるウェッジウッドでは、統計学や原価計算を導入、やはり、会計の恩恵にあずかっていた。そして、複式簿記の考え方は、「ロビンソンクルーソー」でも見受けられる。人生のプラスとマイナスをそれぞれ帳簿の借り方と貸し方に振り分け、どうやら差し引きプラスだという結論に達したうえで、絶海の孤島での生活を乗り切ったのである。

公認会計士の登場は、膨大な資産の管理を要求される鉄道事業の出現に端を発する。なにしろ、用地と線路から石炭、駅舎、・・・膨大な貨物など膨大な会計報告の陰で不正の入り込む余地も大きかった。スコとランドやイングランドの制度化のあと、１８８７年になってようやくアメリカ公認会計士協会が設立されたのである。

そのアメリカで、エンロンやサブプライムローンによるリーマンショックが起きたことは記憶に新しい。正しい帳簿（財務会計）こそが国や企業、国民を救う、これがこの本の結論のようである。（完）

イチローと正岡子規

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

本日未明、記者会見で、米大リーグマリナーズのイチローが現役引退を表明した。昨年五月に選手登録を外れ会長の特別補佐に就任、その後も現役復帰を目指していたが、東京ドームでの大リーグ開幕戦で選手として出場し、日本での幕引きをした形となった。

日米通算安打４３６７というのは、比類なき金字塔である。これからも練習を続けるという「野球に対する無類の愛」には頭が下がる。４５歳ながら、徹底した節制と準備でその体形と動作は若い時と少しも変わらない。

私は、１９９５年頃、オリックス時代のイチローにテレビ局で会ったことがある。ちょうど、阪神淡路大震災の年で、私がテレビ朝日のニュースステーションに出演していた時の事だったが、この時イチローも所属していた神戸市内のオリックス寮で被災していた。

その年イチローは、首位打者、打点王、盗塁王、最多安打、最多出塁率の五冠を達成していた。その日、確か、ピッチャーの平井と二人がテレビ朝日に来局していた。ところが、そのため、私が普段使っている出演者用の更衣室から追い出され、何か、洗濯機や掃除道具の置いてある倉庫のような小部屋で着替えをせざるを得なかったのだ。イチローと言えば、別に背広に着替えるどころか、ジャージにウィンドブレーカーで外からそのままスタジオ入りしていた。結果的には、私は普段通りの更衣室を使えたはずであった。その頃イチローはすこぶる寡黙で気難しく、「サイボーグ」などと言われていた。今回の饒舌な１時間余りの未明会見など当時は想像だにできなかった。

「野球に対する無類の愛」にはイチローに負けない人物がいる。俳人の正岡子規である。子規の本名は升（のぼる）だが、それをもじって野球（のぼーる）と雅号を称していたともいわれている。子規は大学を卒業して新聞記者になったが、「四球」「死球」「打者」などの訳語は子規だと言われている。

多くの野球に因んだ句のうち数句を選べば、

・春風や　まりを投げたき　草の原
・草しげみ　ベースボールの　道白し
・若草や　子供集まりて　毬を打つ

等が見受けられる。

野球に対する思いは、親友夏目漱石にも受け継がれたようで、現在、松山には「坊ちゃん球場」があり、松山という街自身が、高校野球の名門校をいくつも擁しており、さながら「野球王国」の様を呈している。

町のあちこちには、「俳句ポスト」が配置してあり、まさに「俳句王国」である。

奇しくも、伝説的なスポーツ選手と俳人が野球というもので繋がっているとは面白い。（2019.3.22 了）

「戯伝写楽」を観て

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

極めて奇想天外である。作者中島かずきは、こともあろうに、写楽を女に仕立てている。いかに写楽が素性が知れないとはいえ、まさか、女流の浮世絵師とは、北斎の娘ではあるまいしである。十辺舎一九、北斎、歌麿、それに版元（出版人）蔦屋（つたや）重三郎も舞台には登場する。

写楽の浮世絵は、対象を美しく描くというより、内面の真実、時に醜く写し取っている。そういう意味では、世紀末のフランスの画家ロートレックに似ているかもしれない。迅速かつ的確に対象の形態を捉える才能や、人物の内面をえぐり取る観察力に秀でていた和製ロートレックともいうべき存在であろう。

現代で言えばプロデューサー業ともいうべき蔦屋の存在の大きさも舞台で良く伝わってくる。安室奈美恵や華原朋美を世に出して、ごく最近引退した小室哲哉のごときである。人の面倒見がよく、新進の芸術家の才能をいちはやく見抜く才も持ち合わせていた。レンタルビデオの大手ＴＳＵＴＡＹＡの創業者も「現代の蔦屋になりたい」といことで店の名前を付けた」と言われている。蔦屋は、隆盛を極めたが、松平定信の寛政の改革により財産の半分を没収されたりもした。

私が初めて写楽に接したのは、少年時代、切手収集ブームのころだ。記念切手の花形ともいうべき切手趣味週間シリーズの中でも特に人気のあった浮世絵シリーズの一つで写楽の描いた歌舞伎役者「市川蝦蔵」である。面長で鼻がばかでかくお世辞にでもハンサムと言えない。役者絵はブロマイドともいうべきで、出来るだけ美しく描かなければ意味がないのだが、まったく逆である。同じ浮世絵シリーズでも「ビードロを吹く娘」や「見返り美人」などは、正統派絵師、喜多川歌麿、菱川師宣によって実に艶めかしく描かれている。「見返り美人」は当時から収集家にとっても垂涎の的で１０円切手なのに時価６、０００円もする。因みにビードロは１、２００円、写楽の蝦蔵は１、０００円ほどだ。

謎の多い東洲斎写楽、生没年不詳で、約１０か月の短い期間に１４５点余りの作品を残している。今一番有力視されている説は、宝暦１３年（１７６３年）から文政３年（１８２０年）まで生存、本職は阿波徳島藩主蜂須賀家お抱えの能役者斎藤十郎兵衛というもので、中島かずきもこの説にのっとっている。

東洲斎というペンネームの意味は、江戸の東に洲があったという土地を意味し、住んでいたところが八丁堀か、築地あたりか。斎藤十郎兵衛がたしかに八丁堀に住んでいたという事実もあるらしい。一番肝心の能役者が果たしてこれほどの絵を描けるのかという事実もあり、別人説もある。それは、例えば同時代の初代歌川豊国、北斎、歌麿、円山応挙などである。しかし明らかに彼らとは絵の傾向が異なる。写楽の評価は毀誉褒貶相半ばで、「レンブラントやベラスケスと並ぶ『世界三大肖像画家』と称賛する」一派もいれば、素人の好事家ごのみと切り捨てる向きもある。言えるのは、浮世絵師の中で時代の流れに乗らず極めて特異な存在であったことだ。あとは、個人の好みであり、本来芸というのは好きな人もあれば、つまらないと無視する集団もどこにでもいる。写楽は、おそらく世の評判などどうでもよく「写楽（しゃらく）せい」と江戸弁で吐き捨てるに違いない。好きな対象を好きな風に描く、これが真実に近いだろう。作者中島かずきもこの筆致で描いている。（完）

北斎を考える

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

国立西洋美術館で「北斎とジャポニズム」を観た。北斎はそれこそ語るにたる事象があまたあり、さらには書籍も画集を含めて調べるには困ることはない。そこで、人生百年時代という観点から見てみよう。

寿命も伸びて、定年後の長い時間をどうするか、いわゆる定年本が世に溢れている。最近それを批判する「定年バカ」なる新書が大いに売れているという。起業、趣味、地域との接触、投資などだいたいパターンが決まっている。何かやらねばという多くの本の中で、「余計なお世話だ。何もしない自由もいいではないか」という主張で十分納得できる。

９０歳で亡くなった北斎だが、その時何と言ったか？「天が、あと五年の命を与えてくれるなら、本当の絵かきになってみせるものを」。恐ろしいパワーだ。概して画家が長生きなのは、つねにクリエイティブなことを夢想し、手先を常に動かしているからだともいわれている。

ジャポニズムという観点からは、フランスの印象派に或はアールヌーボーの工芸作家（例えばガレなど）に多大な影響をもたらした。しかるに北斎を敬服する点は①９０歳でなくなるまで、上昇志向を常に絶やさなかった、②ヨーロッパの芸術に日本の画家として寄与したという点だろう。１９９９年に発売されたアメリカの著名な雑誌「Life」で「過去１０００年で最も業績を残した１００人」のなかで唯一日本人として第８６位にランクされている。

最も有名な作品は二つ、①神奈川沖浪裏、②凱風快晴（通称赤富士）いずれも富嶽三十六景に含まれる。画家として世に確固たる名声を確立したこの作品集を手掛けたのは実に七十一歳の時、当時はおそらく五十歳が寿命の時代、おそろしく晩成である。

特に藍の使い方が、ヨーロッパの印象派に受け入れられ、「藍狂い」（インディゴマニア）という一群の画家をも生み出している。神奈川沖浪裏もそうだが、同じく富嶽三十六景の一つ「甲州石班澤」は藍の濃淡だけで富士を描いている。

「北斎漫画」という、後進のための写生本は「自然をあるがままにスケッチする」という発想のもと、花、動植物を描いているが、これが、自然を有るがままに映すというモネの「睡蓮」を描く動機とさえ言われている。昨今の北斎を見直す機運の中で、娘の応為も脚光を浴びている。光と影のとらえ方が絶妙で、江戸のレンブラントという異名ももらうほどだ。「吉原格子先之図」などは逸品である。

北斎の実像は、①酒もたばこもやらず、②甘いものが好き、③三食とも出前、④ごみはそのまま放置、要するに、画業以外は全く興味がなく、一生貧乏な長屋暮らしで９０回以上も引っ越ししたそうだ。人生百年時代、一つの生き方として参考になるのではないだろうか？（完）

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/

海外便り

スペイン・モロッコ俳句紀行(5)

元 JICA シニアボランティア
現千葉県 JICA シニアボランティアの会
北垣　勝之

荒涼のサハラ涸れ沢土漠かな
砂漠より勤農励む現地人

今回初めてオート・アトラスを越え、サハラ砂漠入口の町ワルザザートまで行く。マラケシュから 13 時間半の日帰りツアー、小型ワゴン車に中国人 6 人と私達 2 人の総勢 8 人が乗り、途中の見所を巡る旅である。圧巻は山脈越え、曲がりくねった片側 1 車線の道路をくねくね上る。ベルベル人が今なお住んでいる山間の部落や、雪を被った最高峰トゥブカル山(4165m)を眺めながら、時には急峻な岩肌にスリルを味わう。アイト・ベン・ハッドウは一度訪れてみたい場所であった。赤茶けた土漠にポッコリ盛り上がった要塞村といった感じ。マレ川の水があって村ができたのであろう。日干し煉瓦で造られた家の大半は崩れ気味、というのも今此処に住んでいるのは 3 人だけで、大方の住人はすでに近くの新部落に移っている。土産物屋の並ぶ隘路を往復するも執拗な勧誘がない。どうしたことか、以前は強引なガイドやチップを求める子どもがいたのに。やはり世界遺産になってお行儀がよくなったのかもしれない。このアイト・ベン・ハッドウにこだわったのは、いくつかの映画ロケの舞台になった所で「アラビアのロレンス」もその一つ。ヨルダン・アカバ在住時代から何回も見た映画の名場面を確認したいと思ったからである。本ツアーはカスバ街道を往来し、他に 2 カ所ほどカスバを訪れる。途中、昼食を兼ねて立ち寄った映画村は、形骸化したロケの跡が残るだけで、ガイドにチップを渡すための蛇足イベントであった。

マラケシュ近郊にはオリーブやミカンの農場が点在する。大きなファームもある。長年かけて作付けを増やしてきたのであろう。ゴルフ場、酪農と牧草地など色とりどりの土地利用がある中で、オリーブとミカンの栽培は地道な農業として着実に伸びているようだ。収益を上げるにしても、サハラ砂漠地域の外国人相手の観光依存型ではなく、あまねく国民に裨益する地産地消の農業経営の方が望ましいように思う。私としては砂漠(佐幕)より勤農(勤王)を勧めたい。

ベルベルや水より高い小便代

耽々(たんたん)とチップに導くガイドかな

潤滑油サービス対価インシャアラ

日本や東アジア以外の外国ではチップを当然視する国は多い。特に発展途上国では当たり前のことかもしれない。だが、その中でもモロッコは立派な「チップ大国」である。

サハラ・ツアーに行こうものなら小銭を多々用意しておかねばなるまい。長い行程の所々でトイレ休憩を取る。主にレストランとかカフェのような所、トイレの前では使用料を貰おうと管理人が待ち構えている。すでに受け皿には 5DH や 10DH のコインが置かれていて、それ以下では入場できない暗黙の決まりができている。別に定価があるわけじゃないが連中の狡猾な罠である。マラケシュのバス・ターミナルのトイレに入ろうとしたら入口の小母さんがチップを要求する。「いくら要るの」と尋ねると、「いくらでもよい」と言う。「今これしかないから」と 1 DH 置くと「いつも私がきれいに掃除しているんだよ」と不満そう。トイレだけではない、道案内にもカネ、ガイドがつくとカネ、チップに追いまくられる社会である。定価が明示されないだけに始末が悪い。一つ一つは少額だが厄介な習慣である。

ツアー・ドライバーのムスターファさん、アルジェリア国境に近いウジダの出身で 40 年近い運転歴を有す。14 歳の可愛い娘さんと生まれて三か月の子持ち、遠い先祖はベルベル族だと出自を語る。ツアー同行の中国人グループが寄る先々でチップの金払いが悪いのを見て聊か面白くなさそう。というのも彼等は、チップを要求されても「ノーマネー」を連発して無視する。賄賂は払ってもチップ習慣のないお国柄、ノーマネー宣言は見事な対抗策である。彼等はケニアや南ア、エジプトなどアフリカ旅行をしている強者、今回もドバイに 3 泊してからモロッコに来たという。本当の金持ちはチップを払わないようだ。運転手のムスターファさん、チャイナは見限って残る標的は私達だけと見てか「上等の来客は 1 にアメリカ人、2 に日本人、3 にイギリス人」だと言う。「以前ご案内した日本人は 800DH もチップを払ってくれた」と感慨深げに語る。帰り道、マラケシュが近くなるにつれて意味深な述懐が出てくる。最後ホテルに着いて別れ際、彼の手に 100DH 札を握らせた。13 時間半の長時間ドライブは客も疲れたが運転手はもっと大変だったろう。これは義理チップではない、私達を無事に送り届けてくれた感謝の気持ちである。

モロッコのチップ習慣は、完全に神のみぞ知るインシャッラーの世界、授受はお互い神様への感謝の念がベースに無ければなるまい。それが無知な観光客から暴利を貪り取る行為になっては常軌を逸する。しかしサハラ砂漠のベルベル人末裔たちは、逆説的だが金儲けの達人である。自己資産はなくてもチップ取りのシステムを考案し日銭を稼ぐ。積み上げれば相当な額になるはずだ。通りすがりの若者でさえ道案内で小遣い稼ぎをする。あらゆる手段で商機を見つけ出す。逞しきビジネス感覚である。日本の企業や役所も、おもてなし精神でいい格好するばかりでなく少しは見習ってはどうかな。

ジャメールフナ 路(みち) に迷いてクトウビア

マラケシュに汗かき歩く陽春 花(か)

人絶えぬ人種の 坩堝(るつぼ) フナ広場

マラケシュはフェズと並びモロッコを代表する古都である。旧市街メディナのスーク(市場)はまさに迷路、人混みの商店街を異文化散策しているうちに、いつしか方向音痴に

陥る。そんな時、ランドマークのクトウビアを頼りに道を尋ねる。このミナレットは 1199 年に建てられたモスクの一部で、高さ 77m の美しい塔である。日夜を問わず観光客でごった返すフナ広場の西方に位置する。歩き疲れたらカフェで一服、リフレッシュして再び歩き出す。2 月に入って早くも陽春を通り越し初夏の様相、庭園の植え込みに咲くカラフルな花々を愛でながら汗を掻き掻きホテルに戻る。マラケシュを離れる前の最後の一仕事である。

モロッコ食よくてタジンかミントティーか
朝飯はフルーツハムナッツ盛り合わせ
スペインじゃ何はさておきタパス・バル

旅行での楽しみの一つは食にあり。各地各様のグルメや果物など賞味しては至福に浸る。ホテルでの朝食はビュッフェ方式が一般的、ご当地料理もあるが総じて何処も似たり寄ったりの献立である。旨そうな高価な食材を如何にたくさん腹に掻き込むかに掛かっている。したがって食い過ぎ傾向に陥り、食事どきは胃腸薬が欠かせなくなる。ホテル側もコストを考慮しながら多種類の料理をもって豪華さを演出する。主に生ハムやソーセージ、新鮮野菜とフルーツ、ナッツ類の選択と組み合わせで満腹感を与える。モロッコの夕食はタジンがお勧め、肉はトリかビーフかヒツジか、あとは野菜出汁と調味料で多彩なメニュウができる。スープ類もいろいろあってお味佳し。サラダはミジン切りのトマトとキュウリに青菜、そこに蒸した米が添えられる。なるほどコメは穀類ではなく野菜なのだ。そして飲み物は砂糖たっぷりのミントティーで決める。フェズのイタリアン・レストランで国産ビール「フラッグ」を飲んだが水っぽくて感心しない。ここはイスラム国モロッコ、原則禁酒で行くとしよう。その点、スペインには何てったってタパス・バルがある。カウンター奥の気に入ったタパスをいくつか取り寄せ、併せてワインないしビールを発注して座高の高い丸椅子にどっかと座る。後は気ままに飲みかつ食べる。美味い、ジョッキも追加、すっかりバルの虜になる。マドリッドのサンミゲル市場のようなタパス・バルがスペイン中にあり、夕食は必ず飲みながらの食事に落ち着く。郷に入れば郷に従い、アルコールの有無にかかわらず郷土料理を楽しめばよい。(次号に続く)

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/

談話会の話、あれこれ

第 38 回海外情報談話会模様

事務局

第 38 回海外情報談話会が 2019 年 2 月 15 日(金)15 時～17 時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室において開催された。講師は三宅　功様(NTT データ先端技術株式会社　前社長・現相談役、元ＮＴＴ情報流通基盤総合研究所所長)、演題は「世界におけるサイバー攻撃の動向」であった。インターネットの構造、サイバー攻撃者のネットワーク、模擬サイバー攻撃デモ、ダークネット/ダーク Web の世界、米国・中国・ロシア・北朝鮮等の状況、Huawei 問題、日本政府のサイバーセキュリティ戦略など、幅広くかつ熱く話され、質疑応答も活発であった。

以下にいくつかの話題を列挙する。

・情報セキュリティとサイバーセキュリティは異なる。情報セキュリティは情報及び情報システムに対する機密性、完全性、及び可用性を守るために、許可されていないアクセス、利用、公開、途絶、改変、破壊を防止することである。一方、サイバーセキュリティはサイバー空間の利用にあたって、これをサイバー攻撃から保護あるいは防御する能力である。

・危ないと思ったメールなどはサンドボックスでチェックするという教育が必要である。

・インターネットの一般的な検索エンジンで見えるのは全体の 1 割程度である。会員サイト、企業サイト、EC サイトのほか、匿名性の高いダークネットなどがはるかに大きく占めている。

・闇サイト Silk Road 事件、米国 OPM 情報漏洩、Stuxnet、DDoS ボットネットのレンタルサービス、Sony Picture Entertainment 事件、バングラデシュ中央銀行事件、日本年金機構情報流出事件などを紹介するが、中には数年間以上の調査の上で実施するものもある。

・米国の履歴書 Standard Form 86 は、バックグランドチェックのため、約 200 ページの記載が要求されている。

質疑応答として、サイバー攻撃とイノベーション、サイバー傭兵、サイバー攻撃者の育成方法、日本のサイバー防御レベル、兵器とサイバー攻撃、ホワイトハッカーコンテ

ストなど、多数の参加者から活発に提起され、真に“談話”会らしい双方向の刺激的なものとなった。
　なお、講師のご厚意により、著書「CxO(経営層)のための情報セキュリティ」(書店では売り切れ)のご提供があり、先着順で配布された。また、後日、同書 20 冊の追加ご提供があり、次回の海外情報談話会で希望者(先着順)に配布することとなった。

＜事務局注＞講演資料は、講師のご厚意により、下記サイトからダウンロードすることができます。　https://ictov.jimdo.com/home/海外情報談話会/

お知らせ

第 39 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)による第 39 回海外情報談話会を下記のとおり開催いたしますので、ご多忙とは存じますが、奮ってご参加くださいますようよろしくお願い申し上げます。

1. 日時：2019 年 5 月 22 日(水) 15 時～17 時
2. 場所：(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室
　　東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝(さいしょう)ビル 7 階
　　JR 五反田駅から徒歩約 5 分(下図のとおり)
　　http://www.jtec.or.jp/about/access.html
3. 講師：栗崎　由子様(ヨーロッパ・ジャパン・ダイナミクス　代表)
　　NTT で市場調査、国際ビジネス開発などを担当後、経済協力開発機構(OECD)にポストを得て渡欧。公募でポストを得た数少ない日本人。以後、国際機関や多国籍企業で 30 年間、230 ヶ国以上を相手に国際ビジネス第一線を経験。どこでもたったひとりの日本人という環境に鍛えられ、数々の失敗から培った現場で使える異文化コミュニケーション力は、クライアントからの信頼につながっている。
　　横須賀生まれ。人と森と旅を愛する。オンラインセミナー 地球市民塾主宰。
　　ウェブサイトでは、「30 年ぶりに戻ったら」シリーズを好評連載中。
　　https://jp.geneva-kurisaki.net/
4. 演題：「小さな多文化共生大国スイスから 日本のこれからを考える」
5. 参加費：無料(会員制ではなく、どなたでも参加できます)
6. 定員(先着順)：JTEC 会場 30 名、Web TV 会議室 100 名
7. 申込方法：参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名及び談話会参加希望の旨をご連絡ください。なお、Web TV 会議室への参加ご希望の方はその旨ご記載ください。
　　＜連絡先＞　ICTOV 事務局　info.ictov@network.email.ne.jp

☆欧州勤務約 30 年間の経験を基に、多文化共生などについて、初心者にもわかりやすく、随時質問できる雰囲気の中で、気軽に楽しく談話しながら、学び、考える機会です。乞うご期待！

☆前回講師のご厚意により、著書「CxO(経営層)のための情報セキュリティ」(書店では売り切れ) 20 冊のご提供がありましたので、今回の海外情報談話会で希望者(先着順)に配布いたします。

(注) Web TV 会議室への参加方法は次のとおりです。

① 次のサイトで初回のみ、ミーティング用 Zoom クライアント(サイトの一番上にあるもの)をダウンロードし、インストールする(無料)。それ以上の操作(ID 入力等)は不要です。なお、Zoom はクラウドベースの Web TV 会議室システムであり、パソコン(カメラ付がよい)、スマホ、タブレットのいずれでも可能です。
https://zoom.us/download

②Web TV 会議室の案内が海外情報談話会開始 5 分前までにメールで届くので、メールで指定された Web TV 会議室に入室する。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 85 号を発行することができました。今回は新たに「MOOCs その後－グローバルな動向」のご寄稿などもあり、誠にありがとうございました。今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

当会報編集長の村上勝臣さん(仙台市在住)が 2019 年 1 月 19 日急逝されました。当会設立時メンバーの一人として、会報編集などにご活躍され、数日前までメール交換していたところでした。海外情報談話会には、いつも仙台市から夜行バスで参加し、会場写真を撮り、打上げ会で親しく飲み、夜行バスで帰っていたことを思い出します。村上さんは NTT でタイ電話会社 TT&T に出向し、チェンマイ地方の支社長をされ、その後、JICA シニアボランティアとしてカンボジア、トンガでご活躍されました。1 月 23 日の告別式に参列した時、若き村上さんの逞しく骨太の身体、海辺で娘さん、息子さんと遊ぶ凜々しい姿の写真を見て感動し、その後のご活躍の片鱗を見た思いがしました。もう村上さんの声を聞けないと思うと本当に悲しく淋しく思います。それでも、村上さんの行動力を思い出し、改めて当会のサステナビリティを心に誓いたいと思います。村上さんのご冥福をお祈りいたします。

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当： 空席（編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)
ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)